長野大学紀要　第14巻第2号　205-211頁　1992

重要な他者と勝利志向的スポーツ態度
――中学・高校の野球、バレーボール部員の事例――

Significant Others and Professionalized Sport Attitudes of Students Participating in School Baseball and Volleyball Teams

飯島俊明　荻原　周
Toshiaki Iijima　Makoto Ogiwara

1．はじめに

この研究はスポーツと子どもの社会化に関する研究の一環として行われたもので、この小論では、スポーツの中でも取り分け浸透性と話題性が高い野球とバレーボールを組織的に行っている中学及び高校の部活動参加者を対象として、重要な他者とスポーツに対する態度、特に勝利志向の関係について検討を試みた。

今日、学校における部活動をはじめとして子どもの競争的なスポーツ活動が年々隆盛をきわめているが、それに伴い種々の問題が生じている。その一つに、スポーツ経験を通して、どのような価値志向が形成され、強化されるのかが問題とされている。スポーツにおける競争や卓越すること、相手に勝つことなどの規範は、より大きな社会(産業社会、競争社会）の規範を強化することに役立っているともいえる。しかしながら、これらの業績主義的規準はフェアプレーやスポーツマンシップといった社会的により望ましい目標としばしば衝突し、時には、競争は協同的側面を失って闘争に変質することもある。

一般に、子どもの組織的なスポーツ活動は大人の関与によって組織され、管理されている。それゆえに子どものスポーツは大人文化の影響を強く受けていることは否めない。このことは、これまでのスポーツ社会化研究によって明らかにされている。Coakleyは[1]、プレー、ゲーム、スポーツの構造の相違と子どものそれらの活動での主体的経験を検討し、未組織ゲームでは創造性や協力する態度が顕著であるのに対し、組織的スポーツでは権力や権威を受容する態度が顕著であることを明らかにしている。またWebbは[2]、競争的スポーツで重要視される3つの価値（fairness or equity, skill, victory）の組み合わせからなる勝利志向態度の尺度（Professionalization Scale）を用いて、子ども（小・中・高校生）のプレー態度を調査し、組織的スポーツでは勝利やスキルに価値をおく態度が形成され易いことを示唆した。Webbと同様の方法を用いたMantelとVander Veldenの組織的スポーツ参加者と非参加者（11－12歳）のスポーツに対する価値志向の比較分析では[3]、組織的スポーツ参加者は勝利やスキルを重視する傾向が強いのに対し、非参加者はフェアプレーを重視する傾向が強いことが明らかにされている。これと同様の結果が、MaloneyとPetrie[4]、KiddとWoodman[5]、小椋・他[6]、飯島[7]などによって報告されている。特に飯島（前出）は、大学生の調査から、組織的なスポーツ経験が長い者ほど、また高度な競争的状況に関与した者ほど勝利志向の傾向が顕著となることを明らかにしている。これらの結果によると、組織的なスポーツはルールやスポーツマンシップに従ってプレーするといった社会的、協同的な態度を形成するというより、むしろ勝利やそのための技能に価値をおく態度形成を促す社会化装置として機能しているといえる。

さらに、勝利至上主義的傾向や能力主義的傾向がスポーツにおける「疎外」や「脱落」（drop out）の問題を生み出している[8]。OrlickとBotterillは[9]、子どものスポーツへの大人の過介入がドロップアウトする子どもを作っていることや、技能重視が子どもたちに不安を抱かせていることを明らかにしている。これと関連して、過度の競争的

状況から生ずる心理的ストレスが子どもの情緒安定性を損なうという指摘や[10]、子どもへのプレッシャーが心理的不適応を生み易いことや[11]、道徳性の発達に望ましくない態度を形成し易いことが報告されている[12]。

子どものスポーツに対する価値意識や態度の形成に重要な影響を与える要因として、より具体的な文脈の下で、個人と文化の媒介者として大きな影響力を持つ人物、すなわち「重要な他者」(significant others) の存在を無視することはできないだろう。これまでの研究報告を概観すると、スポーツ社会化範例に基づく、Snyder と Spreitzer[13][14]、Greendorfer・他[15][16]、深沢[17]、飯島[18]などの研究（大人、特に親の影響が大きいことや、先生や友達の影響など）や、役割モデリング法による Brim と Wheeler の研究（仲間の影響について）や[19]、認知論的視点からの McElroy と Kirkendall の研究（親の影響が強いこと）[20]などがある。さらに子どもの勝利志向態度にコーチの影響が強く働いていることを結論づける Albinson[21]及び Vaz[22]の研究報告がある。一般に、子どものスポーツ態度に大きな影響力を持つ重要な他者として、親、友達、学校の先生やコーチ、近隣の大人などを上げることができるが、特に親は大きな影響力を持つようである。

また、重要な他者の役割は子どもの性タイプによって異なるようである。これまでのスポーツに対する態度、特に Webb が提起した勝利志向 (professionalized sport attitudes) に関する研究では、勝利志向態度は、女子より男子の方が強いことが明らかにされている（Webb[2]、Petrie[23]、Maloney と Petrie[4]、Kidd と Woodman[5]、Loy・他[24]、McElroy と Kirkendall[20]、飯島[7]など）。McElroy・他（前出）は、スポーツプログラム参加者（11～18歳）の勝利志向態度と親の心理的サポートとの関係を調べ、親の心理的サポートは男子の勝利志向態度と有意な関連性があるのに対し、女子の勝利志向態度とは関連性が認められないことを報告している。スポーツ態度にみられる性差は伝統的なステレオタイプ的性別役割、特に業績主義的規準をめぐる男女の社会化の差異によるものであり[1][23]、主に社会化過程の早い時期における要因（重要な他者）の影響によるものとみられている[25]。スポーツ態度は、基本的には性別役割の社会化に大きく影響されていることが示唆される。しかも、子ども期における勝利志向態度は成人期を通して持続される傾向が強いことが、小椋・他の成人（男子）を対象に行った遡及的調査で明らかにされている[6]。このことからも、子ども期におけるスポーツ態度研究の重要性が示唆される。

以上、本研究を進める上で重要と思われる問題点と先行研究について通観を試みた。なお筆者たちは本研究の一環として、小学校高学年の児童、すなわち組織的なスポーツ活動への参加を求め、且つ性役割習得の社会化が重要視される時期にある子どもを対象に、スポーツ社会化のパラダイムに依拠し、重要な他者、特に親のサポートの程度と勝利志向態度の関係について検討し、男女児とも、この時期においては両者の間に明確な関連性は認め難いとする結果を得ている。ここでは、認知論的視点から、中学期と高校期における部活動参加者―男子は野球、女子はバレーボール―を対象として、重要な他者のタイプ及び親の心理的サポートの程度と勝利志向態度の関係について、Webb の勝利志向態度の概念を用いて検討してみたい。この分析は、性別に行われ性差についても検討がなされる。

II．対象と方法

上述の目的を遂行するために使用する資料は、上田市及びその周辺に所在する中学（7校）と高校（9校）の野球（男子）とバレーボール（女子）の部活動参加者から収集された中学男子279名、女子291名、高校男子279名、女子206名の標本である。標本の学年別構成比は、中学については1年男子34.1%（女子37.1%）、2年男子36.2%（女子34.7%）、3年男子29.7%（女子28.2%）であり、高校については1年男子41.2%（女子39.8%）、2年男子26.9%（女子33.5%）、3年男子31.9%（女子26.7%）である。調査時期は1990年6～7月である。調査法は質問紙法による。調査票の配布及び回収は顧問教師または学級担任の協力を得て行われた。なお上述の標本数は回収不能票及び集計不能票を除いた集計票数であって、集計率は中学男子76.2%（女子88.7%）、高校男子75.8%（女子93.9%）である。

表1　Webbの勝利志向態度（professionalization）のスケール[2)]

Game Orientation					
Play Orientation			Professional Orientaion		
1	2	3	4	5	6
Fair	Fair	Play	Play	Beat	Beat
Play	Beat	Fair	Beat	Fair	Play
Beat	Play	Beat	Fair	Play	Fair

スポーツに対する勝利志向態度は、Webb（前出）のThree Item Play Scaleとほぼ同様のスケールによって測定された。すなわちゲームをする時、（ア）できる限りの最善を尽くす（プレー）、（イ）相手に勝つ（ビート）、（ウ）フェアにプレーする（フェア）の3項目のうち、どれを最も重視するかを重要と思う順に順位づけることを求め、その等級付けから回答者の勝利志向の程度を評定した。このスケールは6段階からなり、勝利志向の最も低い段階（1位フェア、2位プレー、3位ビート）から勝利志向の最も高い段階（1位ビート、2位プレー、3位フェア）へと連続するものと考えられているが、ここでは統計的処理上の都合から細分化することを避け、「プレー志向型」と「勝利志向型」とにゲーム志向を類型化して集計・整理した（表1参照）。

重要な他者については、「親、友達、先生・コーチ、その他」のうちで、回答者がスポーツを行うことに最も関心をもっている人はだれか、の質問項目に対する回答によって決められた。

子どものスポーツ活動に対する親の心理的サポートの程度については、回答者に「自己のスポーツ能力に対する親の評価」及び「自己のスポーツ成績に対する親の期待度」の2項目について、5段階評定によって回答するように求めた。この認知された親の心理的サポートの程度は、3段階評定（低い、中間、高い）によって集計・整理された。

Ⅲ．結果と考察

勝利志向的なスポーツ態度と重要な他者の関係を調べるためにx^2-検定が用いられた。表2は、重要な他者のタイプと部活動参加者の性の関係を中学、高校別に示したものである。中学、高校とも、重要な他者のタイプと性との間に有意な関係が認められる（$p<0.01\sim0.001$）。性差は、特に親をめぐってみられる。全体的に眺めると、中学及び高校の男女とも、最も重要な他者として親を選ぶ者がかなりの高率を示し(61～77%)、次いでその他・不明を除くと、友達、先生・コーチの順であるが、親を最も重要な他者とする者は、中学では男子より女子の方が多いのに対し（女子75.3%、男子65.9%)、高校では逆に女子より男子の方が多いことは興味あることである（男子76.7%、女子60.7%)。さらに重要な他者のタイプについて、中学と高校の同性間の比較をした結果によると、男女とも有意差が検出され（男子$p<0.05$、女子$p<0.01$)、親を最も重要な他者とする傾向は、女子の場合は高校生より中学生の方が顕著であるのに対し、男子の場合は中学生より高校生の方が顕著である。この学校段階にみられる男女間の相違及び同性間の相違は、甲子園を目指す子どもの野球に対する親の関心の高まりが反映されたものであるのかもしれない。このような高校野球の親―子セットの関係は、飯島のプロ野球選手の遡及的調査結果[27)]と一致するものである。先生・コーチを最も重要な他者とする者が中学のみならず高校においても最も低率（3～10%）であることは注目される。

表3は、部活動参加者のゲーム志向（プレー志向―勝利志向）の状況を学校段階別、性別に示したものである。この二分法（プレー志向―勝利志向)よると、中学は、男女ともプレー志向優位(男

表2　部活動参加者の性別重要な他者のタイプ　(%)

重要な他者	中学 男子	中学 女子	高校 男子	高校 女子
(N)	(279)	(291)	(279)	(206)
親	65.9	75.3	76.7	60.7
友達	15.4	8.6	9.3	14.1
先生・コーチ	9.7	3.0	5.7	8.7
その他・不明	9.0	13.1	8.2	16.5
	$x^2(3)=19.243$		$x^2(3)=15.125$	
	$p<0.001$		$p<0.01$	

(備考) 男子は野球、女子はバレーボール（以下、同様である）
中・高男子差：$x^2(3)=9.347$　$p<0.05$
中・高女子差：$x^2(3)=15.109$　$p<0.01$

表3　部活動参加者の性別ゲーム志向　(%)

ゲーム志向	中学 男子	中学 女子	高校 男子	高校 女子
(N)	(279)	(291)	(279)	(206)
プレー志向	55.9	63.2	33.0	42.2
勝利志向	44.1	36.8	67.0	57.8
	$x^2=3.168$		$x^2=4.362$	
	$p=<0.1$		$p<0.05$	

(備考) 中・高男子差：$x^2=29.729$　$p<0.001$
中・高女子差：$x^2=21.447$　$p<0.001$

子55.9%、女子63.2%）であるのに対して、高校は、男女とも一変して勝利志向優位（男子67.0%、女子57.8%）となることは注目される（中学と高校の同性間の差は男女とも$p<0.001$）。性差については、中学の場合、この二分法からは統計的に性差の存在は認め難いが（$p<0.1$）、プレー志向重視の傾向は男子より女子の方が強いといって差し支えなかろう。高校の場合は、この二分法においても性差の存在が認められる（$p<0.05$）。勝利志向重視の傾向は女子より男子の方が強いようである。これらの結果から、中学期では、スポーツの協同的側面やプレー要素を維持することを重視する態度が強いのに対し（特に女子）、高校期では、身体的卓越性やスポーツにおける成功を重視する態度が顕著となる（特に男子）ことが示唆される。この傾向は、スポーツの高度化の程度と一致するものとみることができる。

重要な他者のタイプとゲーム志向（プレー志向—勝利志向）の関係については、表4に示した通りである。中学男女と高校女子では、重要な他者のタイプとゲーム志向との間になんらの関連性も存在しないようである。しかしながら高校男子(野球）の場合、両者の間に有意な関連性が認められる（$p<0.05$）。この結果は、先生・コーチなどが部員の勝利志向的なスポーツ態度に大きな影響を与えていることを示唆するものである（勝利志向が8割強)。一方、友達の影響は必ずしも勝利志向的なスポーツ態度と関係があるとはいえないようである（プレー志向が5割強)。先生・コーチの影響力の強さは高校女子バレーボール部員にもみられる(勝利志向が8割強)。しかしながら統計的には有意とは認め難い。

次に、勝利志向的なスポーツ態度は親の心理的サポートの程度によって差異があるかを検討してみよう。表5、6は認知された親の心理的サポートの程度—スポーツ能力に対する親の評価及びスポーツ成績に対する親の期待度—とゲーム志向（プレー志向—勝利志向）の関係について、学校段階別、性別に分析した結果である。ここで、特に親—子の関係を取り上げた理由は、親は子どもが最初に出会う社会化のエイジェントであり、子どものスポーツについても大きな影響力を持つ存在であると考えたからである。このことは、表1の結果からも明らかにされている。表5の子どものスポーツ能力に対する親の評価の程度とゲーム志向の関係についての分析結果では、中学及び高校の男女とも、両者の間になんらの関連性も存在

表4　重要な他者のタイプとゲーム志向　(%)

性別・ゲーム志向	中学 親	中学 友達	中学 先生・コーチ	中学 その他・不明	高校 親	高校 友達	高校 先生・コーチ	高校 その他・不明
男　子(N)	(184)	(43)	(27)	(25)	(214)	(26)	(16)	(23)
プレー志向	56.6	51.2	48.1	68.0	33.6	53.8	18.8	13.0
勝利志向	43.5	48.8	51.9	32.0	66.4	46.2	81.3	87.0
	$x^2(3)=2.563$		$p>0.05$		$x^2(3)=10.767$		$p<0.05$	
女　子(N)	(219)	(25)	(9)	(38)	(125)	(29)	(18)	(34)
プレー志向	62.6	68.0	44.4	68.4	43.2	48.3	16.7	47.1
勝利志向	37.4	32.0	55.6	31.6	56.8	51.7	83.3	52.9
	$x^2(3)=2,094$		$p>0.05$		$x^2(3)=5.629$		$p>0.05$	

表5　認知された親の心理的サポートの程度とゲーム志向（1）（%）

性別・ゲーム志向	スポーツ能力に対する親の評価 中学 低い	中学 中間	中学 高い	高校 低い	高校 中間	高校 高い
男　子（N）	(72)	(121)	(86)	(41)	(123)	(115)
プレー志向	48.6	54.5	64.0	36.6	35.0	29.6
勝利志向	51.4	51.5	36.0	63.4	65.0	70.4
	$x^2(2)=3.905$	$p>0.05$		$x^2(2)=1.006$	$p>0.05$	
女　子（N）	(60)	(164)	(67)	(59)	(114)	(33)
プレー志向	58.3	68.3	55.2	47.5	42.1	33.3
勝利志向	41.7	31.7	44.8	52.5	57.9	66.7
	$x^2(2)=4.274$	$p>0.05$		$x^2(2)=1.732$	$p>0.05$	

表6　認知された親の心理的サポートの程度とゲーム志向（2）（%）

性別・ゲーム志向	スポーツ成績に対する親の期待度 中学 低い	中学 中間	中学 高い	高校 低い	高校 中間	高校 高い
男　子（N）	(24)	(68)	(187)	(13)	(60)	(206)
プレー志向	62.5	60.9	52.9	46.2	51.7	26.7
勝利志向	37.5	39.1	47.1	53.8	48.3	73.3
	$x^2(2)=0.670$	$p>0.05$		$x^2(2)=14.178$	$p<0.001$	
女　子（N）	(34)	(100)	(157)	(17)	(94)	(95)
プレー志向	79.4	72.0	54.1	58.8	56.4	25.3
勝利志向	20.6	28.0	45.9	41.2	43.6	74.7
	$x^2(2)=12.717$	$p<0.01$		$x^2(2)=20.846$	$p<0.001$	

しないようである。しかしながら表6の、子どものスポーツ成績に対する親の期待度とゲーム志向の関係についての分析結果では、中学男子を除いて、高校男子及び中学と高校の女子で両者の間に有意な関連性が認められる（$p<0.01\sim0.001$）。高校の野球部員及び中学と高校の女子バレーボール部員の場合、自己のスポーツ成績について、親の期待度が高いと認知する者は低い者に比べて、勝利志向的なスポーツ態度を示す者が多い（高校男子「高い」73.8%、「低い」53.8%。中学女子「高い」45.9%、「低い」20.6%。高校女子「高い」74.7%、「低い」41.2%）。一方、親の期待度が低いとする者は高い者に比べて、プレー志向を重視するものが多い（高校男子「低い」46.2%、「高い」26.7%。中学女子「低い」79.4%、「高い」54.1%。高校女子「低い」58.8%、「高い」25.3%）。以上の結果によると、質問項目の間に統計的に一貫した傾向は見い出し難いが、親の心理的サポートは、中学の男子は例外として、性タイプに関係なく、なんらかの形で子どもの勝利志向的なスポーツ態度に影響を与えていることが示唆される。この結果は、MeElroy・他（前出）の性差が存在するという報告と異なるようである。

Ⅳ．まとめ

子どものために組織されたスポーツが勝利第一主義的傾向や能力主義的傾向を強めるに連れて、子どもの態度形成の面でも種々の問題を生み出し

ている。しかしながら現状では、それに関する体系的な研究が不足している。この小論の目的は、野球（男子）とバレーボール（女子）の部活動参加者のスポーツに対する態度、特に価値志向と重要な他者の関係について、Webb の勝利志向態度（professionalized sport attitudes）の概念を用いて検討することであった。この分析・検討は、統計的処理上の制約により「プレー志向」と「勝利志向」の二分法によって行われた。結果は、次のように要約することができる。

(1)　「プレー志向」と「勝利志向」の二分法から眺めた野球（男子）とバレーボール（女子）の部活動参加者のスポーツ態度は、中学期では男女ともプレー志向優位の傾向が強いが（特に女子）、高校期では男女とも勝利志向優位となる（特に男子）。

(2)　彼ら（彼女ら）の最も重要な他者は親である。親を最も重要な他者とする傾向は、野球（男子）の場合は中学より高校において顕著であるが、バレーボール（女子）の場合は高校より中学の方が顕著である。バレーボール（女子）のケースは一般的な傾向を示すものであるが、野球（男子）の場合は特別なケースとみるべきであろう。先生・コーチを最も重要な他者とする者が極めて低率であることは注目される。

(3)　高校の野球部員にのみ重要な他者のタイプとスポーツ態度との間に有意な関係が認められた。勝利志向態度は、特に先生・コーチの影響と関連が強いようである。これに対して、友達の影響は必ずしも勝利志向態度と関連するものではないようである。

(4)　2項目から眺めた親の心理的サポートの程度と子どもの勝利志向態度との間に、統計的に一貫した傾向は見い出し難いが、性タイプに関係なく（中学の野球を除いて）関連性が存在するようである。親からすぐれたスポーツ成績をあげることを期待されていると認知する者ほど勝利を重視する態度を持ち、一方、親の期待度が低いとする者ほどプレー志向重視の態度を持つようである。

(5)　(1)の中学から高校にかけてみられるスポーツ態度の大きな変化については、本研究の結果からは明らかにし難いが、一つには、態度変容の結果として、もう一つは、高校スポーツの高度化により勝利志向的な態度を持つ者が選別されるためとみることができる。いずれにしても重要な他者の影響――般的には親の影響や特に野球においては指導者の影響―は無視できない要因である。

（いいじま　としあき　非常勤講師）
（おぎわら　まこと　助教授）

（1992．6．30受理）

参考文献

1）Coakley, J.J., “Play, Games, and Sport : Development Implications for Young People.” Annual Meeting of American Alliance for HPERD, 1979.

2）Webb, H., “Professionalization of Attitudes Toward Play Among Adolescents.” In G. Kenyon(Ed.), Sociology of Sport. Atheletic Institute, 1969, 161-178.

3）Mantel, R., & Vander Velden, L., “The Relationship Between the Professionalization of Attitude Toward Play of Preadolescent Boys and Participation in Organized Sport.” In Sage. G. (Ed.), Sport and American Society. Addison-Wesley, 1974, 172-179.

4）Maloney, T., & Petrie, B., “Professionalization of Attitudes Toward Play Among Canadian School Pupils as a Function of Sex, Grade, and Athletic Participation.” Journal of Leisure Research, 1972, 4, 184-185.

5）Kidd, T., & Woodman, W., “Sex Orientation Toward Winning in Sport.” Research Quarterly, 1975, 46, 476-483.

6）小椋博、森川貞夫、枝村亮一、「スポーツに対する態度、特に勝利志向の分析」、『スポーツ参与の社会学』体育社会学研究会編、道和書院、1977。

7）飯島俊明、「学校運動部のスポーツに対する態度、特に価値志向に及ぼす影響について」、『体育・スポーツ社会学研究1』体育・スポーツ社会学研究会編、1982、117-136。

8）影山健、「スポーツ参与の社会学について」、『スポーツ参与の社会学』体育社会学研究会編、道和書院、1882、3。

9）Orlick, T., & Botterill, C., “Why Eliminate Kids?” In A. Tinnakis, T. McIntyre, M. Melnick, & D. Hart(Eds.), Sport Sociology : Contem-

porary Themes. Kendall / Hunt, 1976.

10) McPherson, B., "The Child in Competitive Sport: Infiuence of the Social Milieu." In R. Magill, M. Ash, & F, Smoll(Eds.), Children in Sport: A Contemporary Anthology. Human Kinetics, 1978.

11) Rarick, G., "Competitive Sports in Childhood and Early Adolescence." In R. Magill, M. Ash, & Smoll(Eds.), Children in Sport: A Contemporary Anthology. Human Kinetics, 1978.

12) Chissom, B., "Moral Behavior of Children Participating in Competitive Sports." In R. Magill, M. Ash, & F. Smoll(Eds.), Children in Sport: A Contemporary Anthology. Human Kinetics, 1978.

13) Snyder, E., & Spreitzer, E., "Family Influence and Involvement in Sports." Research Quarterly, 1973, 44, 294-255.

14) Snyder, E., & Spreitzer, E., "Socialization Comparisons of Adolescent Female Athletes and Musicians." Research Quarterly, 1978, 49, 324-349.

15) Greendorfer, S., & Leowko, J., "Role of Family Members in Sport Socialization of Children." Research Quarterly, 1978, 49, 146-152.

16) Greendorfer, S., & Blinde, E., & Pellegrini, A., "Gender Differences in Brazilian Children's Socialization into Sport." International Review of Sport Sociology, 1986, 21(1), 51-63.

17) 深沢宏、「児童の運動への参与に関する研究—特に運動部への加入からみた—」、『スポーツ参与の社会学』体育社会学研究会編、道和書院、1977.

18) 飯島俊明、「子どものスポーツへの社会化にみられる家族および家族成員の役割」、『子どものスポーツを考える』体育・スポーツ社会学研究会編、道和書院、1987、99-113.

19) Brim, O., & Wheeler, S. (Eds.), Socialization After Childhood. Wiley, 1966.

20) McElroy, M., & Kirkendall, D., "Significant Others and Professionalized Sport Attitudes." Research Quarterly, 1980, 51, 645-653.

21) Albinson, J., "Professionalized Attitudes of Volunteer Coaches Toward Playing a Game." International Review of Sport Sociology, 1973, 8 (2), 77-87.

22) Vaz, E., "What Price Victory? An Analysis of Minor Hockey League Player's Attitudes Towards Winning." International Review of Sport Sociology, 1974, 9(2), 33-55.

23) Petrie, B., "Achievement Orientation in Adolescent Attitudes Toward Play." International Review of Sport Sociology, 1971, 6, 89-101.

24) Loy, J., Birrell, S., & Rose, D., "Attitudes Held Toward Agnostic Activities as a Function of Selected Social Identities." Quest, 1976, 81-89.

25) Nicholson, C.S., "Some Attitudes Associated with Sport Participation Among Junior Females." Research Quarterly, 1979, 50, 661-667.

26) 飯島俊明、荻原周、「子どものスポーツに対する勝利志向態度と重要な他者の関連」、『長野大学紀要』、第11巻4号、1990、39-44.

27) 飯島俊明、「一流競技者のスポーツへの社会化にみられる社会化エイジェントの役割」、『長野体育学研究』、第2号、1986、1-6.